

『ヴィタリテ』に込めた思い

— 50号までの歩みを振り返って —

佐多 保彦

聞き手：編集部

佐多：今までたくさんの方にインタビューしてきましたので、最終号の今回は私がインタビューされる側に立ってみたいと思います（笑）。

——『ヴィタリテ』を発行しようと思ったきっかけはなんですか。

佐多：大学を卒業してすぐに、父が興じた会社（現東機貿）に入社したのですが、その20代の頃、ある企業で営業活動のかたわらニュースレターを作られていた石田民雄さんとお知り合いになり、佐多保彦の定期訪問ということで社外報を発行したらどうですかという話をお伺いしたのがきっかけです。仕事上お知り合いになったお客様をはじめとして、多くの知人・友人を実際に定期訪問することは難しいことですが、社外報をお送りすればそれが訪問することになるのではないかと。『ヴィタリテ』の前身である『update』の発行はこうして実現することになりました。ご縁があったもののおかげでお会いする機会のない方々にも、その時々私に何を考えているのか、なにを感じているのか、そういったことをお伝えしたりできれば、興味を共有したり、コミュニケーションの一手段として役に立つのではないかと考えました。『update』の後にしばらくブランクがあったものの、『ヴィタリテ』の発行年数も入れますと、30年以上私のこの定期訪問は続いたことになります。

——『ヴィタリテ』はどのようなコンセプトで制作されたのでしょうか。

佐多：まず縦軸に流れるメッセージが信仰と愛と希望です。これは「最後に残るものは信仰と愛と希望である」という聖書の一節からとっています。そこで毎号必ず、Faith、Love、Hopeというテーマを軸に原稿を掲載してきました。そして横軸には私の行ってきた活動そのものが表現されています。まず表紙写真にはP.G.I.（フォト・ギャラリー・インターナショナル）の活動を、原稿内容には私の携わっている医療業界の話題や宗教という心の世界のことを、そしてシャトー・ド・シャイイの活動をお知らせするためにブルゴーニュのページをというふうに、縦軸・横軸で立体的にメッセージをお伝えできればと考えたのです。

表紙の写真については、フレームにも入れてそのまま飾っていただけるように、あのような体裁をとっています。極端ですが、内容を読まなくても、写真一枚を見るだけでなにかを心に感じていただければという気持ちからです。



——『ヴィタリテ』も今回で50号を迎えるわけですが、ヴィタリテを通して社長が特にお伝えしたかったものとはなんですか。

佐多：会社経営というのは、よく言われるように白紙の画用紙に絵を描いていくようなもので、特にファミリーカンパニーの場合、オーナーの考えや感性、経営理念などがそこにあからさまに出てしまうわけです。そこで、当社のお客様や社員を中心に医療業界で共に働いている仲間へのメッセージというか、日々どのような気持ちで仕事に携わっていたかという私なりの「心」というものを、私が尊敬信頼する多くの執筆者にご登場願う形で社内外に知っていただければという気持ちから、『ヴィタリテ』の制作を続けてきました。

今まで大変多くの方々に巻頭インタビューにご登場いただきましたが、その時々直感でお会いする方を決めてきました。「佐多さん、よくそんなに様々な方をお親しくご存じですね」と言われるのですが、まだまだ私の切り口でインタビューを通してご紹介したい方はたくさんおられます。私はすばらしい生き方をされている人たちに非常に興味があり、その人たちから学ぶことは本当に多いのです。そして、そのようなにか光るものをお持ちの皆様からのお話にすぐに感動し、その感動を多くの皆様と共有したいと思うのです。感動と言いましたが、以前青山学院の初等部部長をされていた伊藤朗先生が、父兄会の席で「人生は感動です」とおっしゃっていたのがとても心に残ったことを覚えています。感動があってこそその人生ではないか、そして積極的に感動を創り出し、それを私の周りにいる人たちとも共有できる人生としたいものだと思ってきました。「生命力」つまり「ヴィタリテ」を刺激するのはそういう生き方ではないでしょうか。

——感動の原点には「人」があるということですね。

佐多：「人」への関心が、結果として感動を呼び込んでいることは確かだと思います。「人」ということと言えば、最近日本では街の要所要所に銅像が置かれなくなったということをととても残念に思っています。これは言うてみれば、ますます早いスピードで価値観が変化する社会となっていることもさきながら、人を讃えなくなったということのみならず、理想の人間をめざそうという日本人も少なくなってきたせいではないでしょうか。偉人と呼ばれる方々も、人間であるからには長所あれば欠点もあるし、その欠点ばかりをあげつらうのはど

うかなと思うのですが、日本人はどうもその傾向が強いように感じます。ロサンゼルスディズニーランドを入るとすぐに、リンカーンの生き写しの人形がジェスチャー巧みにゲティスバーグの演説を聞かせる館があります。私はディズニーランドに行くと子供たちを連れてよくそこに立ち寄ったものですが、何度見ても感動がよみがえってくるのです。やはり立派な功績を残された方々をそのような形で讃え、記憶に残すということは大切なことだと思います。

最近、ソニー創業者の盛田昭夫さんが残された『メイド・イン・ジャパン』という名著を、外国の友人にあげたいと思って探したところ、驚いたことに英語版は絶版ということでした。そこでつてを頼って探した結果、ソニー本社に何冊が残っているということが分かり、3冊ほどいただくことができました。このような、経営学上も貴重な名著が簡単に絶版になってしまうことは非常にもったいないことだと思います。あとで本の件でお世話になったソニーの皆様をお礼の気持ちでお招きし、夕食をご一緒させていただいた折に、ソニーでぜひ復刊してくださいとお願いした次第です。あの大战後の灰の中から、世界第二位の経済大国にまで日本を育て上げた偉人たちというのは、野球の殿堂入りではないですが、経済界の殿堂入りとでもして相応の扱いをされるべきではないでしょうか。

——本業は医療機器の輸入専門商社の社長であるわけですが、最近の医療業界についてどう考えているのでしょうか。

佐多：弊社は長年海外の優れた医療機器を輸入することに力を入れてきたのですが、年々厚生労働省の輸入許可取得が非常に困難になってきています。海外で既に当たり前のように使われている器材でも、日本に輸入するとなると何年もかかってしまうことがざらです。その上、一つの新製品の輸入許可をとろうとすると試験やらなにやらで億単位のお金がかかってしまうようなこともあります。中小企業には大変な負担であり、やりたくてもできない状況が多々あります。このことは我が国の医療業界における中堅、中小企業振興政策とからんだ非常に深刻な問題となっているのです。医療の世界こそ、メーカーの自己責任で一日も早くグローバルスタンダードで優れた医療機器が自由に流通する世の中になって欲しいものです。

弊社はアメリカとフランスで医療機器のメーカーを2社経営し、

それぞれICUや救急、あるいはホームケアで使われる人工呼吸器や脳神経外科で使われるシャントバルブの開発・製造・販売を行っています。単なる代理店としてだけではなく、自社のメーカーを持つ企業として世界を相手に仕事をしてきました。医療機器の開発には時間もお金もかかるし、常に安全性・信頼性というものを強く意識しなくてはならない上、競合会社は世界の大企業が多く、正直大変なことのほうが多い。そうした中で、生命を扱うというリスクの高い仕事ながら、幸いここまで事故を起こさずにやってきました。しかし、残念ながら一般論として、どうも「医療機器は壊れてはいけない」という考えが強いようです。故障のない器械などあり得ないのです。医療器材に関しては規制というよりも、業界で働く人々の努力を前向きに評価しようとする温かいまなざしや姿勢がないと、今後医療業界で目を輝かせて働くという若者はいなくなってしまうのではないのでしょうか。優れた医療機器が海外からスムーズに入ってくるばかりか、これでは我が国では医療産業が育たないという事態に陥るかもしれません。

驚かれることでしょうが日本が世界に誇れる医療機器の会社というのは実に少ないし、今海外から医療機器が入ってこなくなったら日本はその日から大変困ることになるでしょう。日本のためだけに規制や物事の判断を行うのではなく、世界の大きな流れに沿ってもっとグローバルな在り方を模索するべき日本であって欲しいと強く希望します。あれだけ戦争を繰り返してきた歴史のあるヨーロッパがECとしてまとまったわけですが、医療業界のみならず我が国の行政と言わず我々一人一人の日本人がこの在り方からもっとも積極的に学ぶべき時代ではないのでしょうか。ECの一員になるくらいのもりで、我々日本人は現代における生き方、考え方を根本から変革すべきときにあると思っています。

社長に就任しては25年。会社も本年6月で創立50周年に入りますが、これからよりよい医療機器の輸入・開発・販売をめざし、そして世界の多くの患者さんの“生命力”回復に少しでも貢献できるよう、頑張りたいと思っています。

最後となりましたが、長年にわたりご投稿を続けてくださった奥村神父様や米川先生ほか多くのご執筆者の皆様、そしてご愛読くださいました様々な読者の皆様に感謝申し上げます。